

子どもは何をどのように信じ、何をどのように信じないか

'62年代の子どもの存在信仰

室谷幸吉

人間の精神内面の世界や構造は、幼児期から、学童期・少年期・青年期・壮年期へと、一人ひとりの人間の性格・性情や能力に基盤をおきつつ、成長・発展・変容していく。

ここで、とり扱った「子どもの存在信仰」は、人間の精神を培い育てていく源の根の部分とはいえないだろうが、精神の幹の真皮の部分、あるいは導管の部分、または枝葉の或る部分をあからさまにむき出しにしたものである。

七才の子どもたちが、その年令に達して、突然に、このような状態を見せてくるものではない。子どもたちは、母の胸にだかれて、乳を飲み、ヨチヨチ歩きをし、泥いじりをはじめ、絵本の中に興味のかかやきをぶちつけ、他人から聞くお話、目で見える一切のこととがら——これら過去数年にわたる養育・保育の過程で徐々に、しかも確実に、彼らの内面世界を形成し、造型し、着色してきたのである。

子どもの現実を、よしたしかにとらえる保育者の目のするどきを増すために、いささかでも役だつところがあんならば、それにこし

たことはない。ついでに、一つのことをつけ加えておきたい。関心をもたれる先生方によって、この種の研究や、調査が地域的にも広げられ資料が相互に交換され、子どもらの現代像が教師または父母集団の力で描きあげられることを期待してやまない。

- 1・「ごくらく」は、あると思う……………七・四%
- 2・「ごくらく」なんかどこにもないだろう……………一八・五%
- 3・「ごくらく」は、あるようでもあるし、
ないようにも思う……………一四・八%
- 4・「ごくらく」なんてコトバがわからないな。
それが何のことか、意味がわからない。……………五九・三%

これは「ごくらく」について、子どもそれぞれを考えをきいた時の答えだ。(子どもというのは七才の男女児。住居は東京山の手の住宅地で、生活程度はおおねむ中流。両親の教養程度は中、或いは上。)

これは、現代の子ども達の心の中の状態をいかにも特徴的に表わしているように思う。ほぼ六割の子どもらが、「ごくらく」という

コトバを、彼ら自身のコトバとして持つてはいない。「ごくらく」というコトバが、現代の子どもらにとって廢語に近くなりつつあるのだ。

「ごくらくはあるもの」と信じている哲夫は「空の上にある」と言っている。浩志は、「たのしいところにあると思う」と同じく極楽の存在を肯定し、今ひとり別の子は、「私の本にでていけれど、まだ読んでいない」という。「じっさいにはあるかないか分らないけれど、たのしいことになってる」というのは懷疑派の英一。

廢語化の運命をたどりつつある「ごくらく」に対して、新しい生命を得つつある存在信仰として「宇宙人」がある。「宇宙人」——このコトバは、ここ数年、急速に展開されてきつつある宇宙探検熱の生み出したもので、現代科学の新しいおくりものである。では、このことばは、子どもたちの頭の中にどんなイメージやビジョンをつくり出しているのだろうか。このコトバに見合う子どもたちの概念には、現在のところ、これという確定した姿はなく、各人各様、さまざまに描きわけ楽しんでいるようだ。もっともである。実在する宇宙人など、だれも見えてはいないのだから。

さて「宇宙人」に対する子どもらの理解や信仰の姿勢はつぎのようだ。

- 1・「宇宙人」はいると思う……………四〇・八%
- 2・「宇宙人」はいないと思う……………一八・五%
- 3・いるかないか、どっちともきめられない…四〇・七%

科学の「キワもの」であるだけに、その上、子どもたちの興味に十分添い「知的セツカチ性」にも応え得る適度な大衆性・通俗性を

もっているだけに、子どもらの積極的な気分や姿勢が、ことさらにつく。

▼テレビで星をみた。みんな宇宙人がいるというので、いるのだろうか。(直樹)

▼水星やいろんな星にいけばいると思う。もし土星に人がいて、地球人をみれば、ぼくたちのことを宇宙人だと思うだろう。(浩志)

▼どこかの星にいると思う。そして地球の人と同じようなことをしていると思う。(治)

▼聲明は「月にいる」と断定し、哲夫は「星にいる」と言い切る。同じように葵・エミ・ルミたち女性群も「星にいる」と言いきる。

▼宇宙の星にいる。(アツ子)

▼宇宙にいたるけど、まだ人間はみたことがない。(裕子)

「宇宙人」の内容を構成する材料を、何によって手に入れたか——その間に答えるものを直樹のことはふくんでいる。まず最も有力な知識源はテレビだろう。また次の友康のことは、雑誌・画報といった印刷物も、劣らず貴重な知識源になっていることを解き明かしてくれる。

▼少年サンデーに、サハラさばくにへんならくがきがあるという。

そのほか、いろいろあるという。少年がほうで知った。(友康)

また懷疑派のひとり英一は、「科学が発達すれば分るだろう」と分別のいいことを言う。どうやら「宇宙人」という未知の存在物に対しては子どもの仲間では肯定派の鼻息があらう。懷疑派には、とりたててパッとした意見は見当らぬ。否定派には男が一人も交っておらず、全員女性、そして全く影がかすんでいる感じだ。

存在信仰傾向表

| 態度 存在対象 | 否定的 | 肯定的 | 懐疑的 | 知らない |
|---------------|------|------|------|------|
| てんぐ | 100% | —% | —% | % |
| かっぱ | 92.6 | — | 7.4 | — |
| おに | 77.8 | 11.1 | 11.1 | — |
| 雷さま | 44.4 | 29.7 | 25.8 | — |
| おぼけ | 92.6 | 3.7 | 3.7 | — |
| 火の玉 | 63.1 | 25.8 | 11.1 | — |
| えんまさま | 40.8 | 11.1 | 22.2 | 25.9 |
| ごくらく | 18.5 | 7.4 | 14.8 | 59.3 |
| 天国 | 29.6 | 51.8 | 14.9 | 3.7 |
| 地獄 | 40.7 | 40.7 | 14.9 | 3.7 |
| 神さま | 22.2 | 44.5 | 33.3 | — |
| 仏さま | 14.8 | 51.9 | 22.2 | 11.1 |
| 宇宙人 | 18.5 | 40.8 | 40.7 | — |
| タヌキ・キツネが人をばかす | 85.2 | — | 11.1 | 3.7 |

「あおいは、「天狗、鬼、おぼけ、タヌキ・キツネが人をばかす」の四対象については否定だ。「おぼけ」は「昔いたっていうけど今はいない」と理由をつけてハッキリ否定している。「かっぱ」は「いかいにかわからない」と懐疑的。「ごくらく」については「なんのことか知らない」という。さて以上を除いた他の八対象については、「実際にあるんだ」と存在を肯定している。「雷さま」は「お空の上にいる」、「火の玉」は「よくお寺に行く」と、特にお墓にいる、「えんまさま」は「お空のものすごく上にいる」と存在場所を指示している。「天国」も「地獄」も、共に「空の上にある」、「神さま」は「えらくてとつてもいい人で空にいる」と考えている。「仏さま」は「よくお寺に、ことに石のところにいる」、「宇宙人」は「星にいる」——これがあおいの心の中に描かれている存在物地図

である。

中間型と一応見られる直樹の考えによると、存在を否定されるものは

1・天狗〈作り話に天狗のだいがあった。作り話だからいないんだ〉

2・かっぱ〈だつてさ、川の中を見ただけどいなかたからかっぱなんかいない〉と、目で確かめている。

3・雷さま〈雷のときママが「電気なのよ」といったからいない〉と、これは上長者権威への依存。

4・おぼけ〈ママとパパが「おぼけなんかいないよ」と言った。ぼくははじめはいると思ったが、やっぱりいない〉と、これも他者依存型。存在を肯定しているものは、

1・鬼〈オニの面の時に、オニの面を作ったからいるんだ〉と、たいへん機会衝動的だ。

2・火の玉〈いなかにないたら人間をうめるところに、火の玉がなるんだとママが言ったからあるよ〉と、これまた権威依存型。

3・天国〈人間が死ぬと天国に行くとかの話を書いたからあるんだ〉と、自主的判断の姿勢はたいへん薄い。

4・神さま〈「なんみょうほうれんげきょう、神さま、きょうのかけ算を百点のように」と祈った。そしたらほんとに百点だった〉

という自己体験を証しとして存在を肯定する。

5・宇宙人〈テレビで星をみた。みんなは宇宙人がいるというからいるのだろう〉

このように直樹の場合は、確信といつてもいかにもたよりない、

突き押せばモロに崩れていきそうな弱さが感じられる。それだからこそ、子どもの信憑形成についての外部刺激の重大さが問題にもなるわけだ。

このように見てきて、以上のことから読みとられるところのもの、そのまま子どもの精神発達の『遅れ』とか『進み』とか言いきるには、ためらいがないわけではない。しかしそうはいっても、個々の子どもとの内面的様相は、やはりそれなりに、私たちの、その子どもに対する態度の決定を迫る課題エネルギーを、激発する勢いをはらんで潜めている。それぞれの子どもに最もふさわしい学習の在りよう、思考のパターン、更にその子を、明日はどう育て導き、どの地点に到達させるのか、という要請や必然さなどを、深く広く汲み上げる賢さを私たちは持ちたいものだ。

以下、一つ一つの対象について特徴的な発言を書きとめてみよう。(×は否定的、○は肯定的、△は懐疑的態度の子の発言)

★天 狗

これは全員否定の対象物だ。

・作り話だ。

・昔の人は見たというけど実際はいない。

・ゼツタイにいません。(という断定型)

・本に出ているだけ。

・天狗は鼻が高いが、アンナに鼻が高いなんてふしぎだから。

★かつば

×人がカメを見てカッパだと思ったのだろう。

×作り話だ。

×ゼツタイいません。

★お に

×昔の人はオニは悪い心だということばで、オニをいるみたいにしていたとぼくは思う。(教訓型理解)

×本や話の中だけのこと。

×ゼツタイいません。

×ブドウ酒をのんでいる人をオニだと思ったのだろう。ぼくらの見るオニにはツノがある。

×昔いたけど今はいない。

○おぼあちゃんがイナカで、オニのホラ穴を見たといっていたからいるんだ。

○赤オニを見たことがある。こわい。

★雷さま

×それはオドカシだ。

×マンガやなんかでみる雷さまは、やや鬼にている。

×天から雨がふるのは雷さまがやっているのじゃなくて、ひとりではふるんだと思う。

○お寺とか家に小さなオモチヤでかざってあるときがある。(これは偶像依存の態度)

○雲の上にいる、時々雨をふらせる。

○空の上にいる。

○雷がふらさなかったら、だれが雨をふらすのかわからない。

○天にいる。

△本に雷さまが雨をふらすとかいてあるが――。

△ゴロゴロ音をたてているからね。

★おばけ

×人は迷信深いので、死んでいた人が生き返ると思っていたのだろう。(この子は人間の心を科学的にはあまり信じていない。)

×人が作ったものだ。

×オバケは人を殺したり悪いことをした人たちに、そういうことをしてはいけないということばの名付けだと思う。

×昔いたって言うが今はいない。(科学と文化の進んだ今の世に、そんなことオカシクッテ——という発想・態度は、他の対象についても相当に目立つ。)

×おばけは見たことないし、フシギだ。

×人を殺しているとも見える。

○人の心の中にいます。(人間の心理現象として肯定する子ども)

「おばけ」に限らず、対象の存在や状態を、人間の心の持ち方にあるんだ、と、つまり精神状態に目を向けている子どもたちは、おおむね学業の成績がよく、頭の進んだものであることは注目される。

★火のたま

×ゼツタイいけません。 ×話だけのことだ。

×作ろうと思えば作れるが、じっさいにはないだろう。またホウキ星を見た人が火の玉だろうと思ったのだろう。

○キミがわるい。お墓にういている。

○夜こっそり出る。

○お友達が火の玉を見たことがあるっていつていたから——。

○よく道具やゴミをやす時火のたまがとびちるから、あると思う。
△お寺など、暗いとき、火の玉がとぶらしいけど、よくわからない。

★えんまさま

「ごくらく」が廃語化のコースに乗っていると同じように、このコトバも廃語に近い歩みをたどっているようだ。近代的信仰の対象にはなり得ないものだろう。当然のことながら、子どもたちへの教訓的勢力もほとんど薄れ切っている。

○どっかのどこにいる。

○天の上について悪いことをした人たちに罰をあたえているいい人だ
と思う。

×もしもいるとしたら裁判官みたいな人ではないかな。(否定的態度でいながら、こういう子もある。)

★天国

○いい人が死んだりしたら天国にいくからある。

○死んだ心のいい人が死んだ後行くところ。

○人が死ぬと天国に行く。そしてたのしい。

○人が死んでからいくところ。 ○天にある。

○高い雲の上にある。きれいな花がさいているところ。

○空の上の愉快なところにある。

○人間が死ぬと天国に行くとかの話を書いたからあるのだ。

○天国は空の上にあつて死んだ人達がくる。

○これは空のそのまた上にある愉快なところだと思う。

○おかあさんが死んだ人はみんな天国に行くっていうから。

△実際にはあるかないか分からないが楽しいことになっている。

★地獄

「地獄・ごくらく」と対に言われるこのことは、しかし「極楽」ほどみじめなコトバの下座には転落していない。「天国」との意味上のカップルから使用上の地位を確保しているのかもしれない。

×昔の人はあったと思うだろうが、ぼくはないと思う。

○天国の横にあって悪い人がきたら、あついお湯の中にいれてしまふのだ。

○空の上のこわい所にある。 ○空の上にある。

○悪い人が死んだら行くところだ。

○高い雲の上にあって、こわいアクマがいる。

○悪いことをしてる人が死んでからいく所。

○死んだ心の悪い人が死んだ後いく所。(存在を肯定する予らが、場所を地下と考えず天空に描いていることは注目される)。

△あるかないか分らない。もしあるとすれば危険と恐怖が待っている。

★神さま

○えらくとてもいい人で空にいる。

○空の上にいる人間や動物を作ったり困った人を助ける。

○空にいて正しい心のいい人だ。

○ぼくたちを守ってくれます。

○天国にいる。たくさん花がさいている所。

○自分たちの心の中にいる。(良心説の立場だ)

○ママがいつも神様にたべ物をおそなえしているから、天国にいる。 ○天にある。

○天国にいて世界を作った方。

○雲の上にいる。いいことをしているだろう。

△天国にいるかもしれない。

★仏さま

○インドで生まれたいい人らしい。生まれてから指で上と下をさしていたらしい。

○家の中にいて、テレビの横の箱にいる。

○通る道に立っている。 ○石で村にある。

○お墓の中でねむっている。

○これも空の上にいる正しい心をもついい人だと思ふ。

○オシイサンやオバアサンが死んだ人の家にある。

○たいていの人のお家にあつて、その人たちがお経なんかやる。

○本を読むと仏様の話のついているからいる。

★タヌキ・キツネが人をばかす

×お話にでてくるが忍者みたいにできないと思ふ。

さて、大まかではあるが、以上は、現代に息つきつつある子どもたちの、表面からはうかがい得ない、心の中の在りようを浮かびあがらせてくれて実に興味深い。いや単に興味が深い程度に止まらず、このような実態や現状・傾向に即して、「だから、このように扱うべきではないか」、「このように扱った方がよい」、「このように扱い得る」、といった現実処遇の程度や方法をも、ときあかしてくれるよすがになる。私たちは、現代の子どもたちの、こうした精神的風土図を十分尊重し、深い顧慮の上に、最も適切有効な今日の教育を設計したいものだ。

(明星学園)